

# Udai 教育セミナーレポート

## 「地域が持つ教育力を活かした授業の試み～里山に学ぶ～」

話題提供者: 平井雅世(宇都宮大学 雑草と里山の科学教育センター・コーディネーター)

日時・場所 平成 27 年 5 月 21 日(木) 16:30～17:30

農学部1A31(旧 3301) 参加対象 本学教職員、学生

### ✦ Udai 教育セミナー開催の趣旨

宇都宮大学は、平成 26 年 度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」に採択されました。新たな地域社会の変革を担うべく主体的に挑戦(Challenge)、自らを変え(Change)、社会に貢献(Contribution)する人材を養成するために、従来の学力に加えて「行動的知性」の伸長を図ることを目指しています。本学の多様な授業実践の成果と課題を共有することを目的に、Udai 教育セミナーを定期的で開催しています。第1回は、栃木県の地域的特性のひとつでもある里山の教育資源を活用した体験型教育を行っている、雑草と里山の科学教育センター・コーディネーターの平井雅世先生に、基盤教育(アクティブ・ラーニング科目)として開講されている「栃木の里山に学ぶ」を中心に、体験型教育の成果と課題をご報告いただきました。



### ✦ 授業の目標

まず、里山に学ぶことの意味として、その地が、人々が持続的に自然に働きかけ、その恵みを生活に活用する知恵が凝縮しているという点を挙げられました。また、「日本の基層文化を象徴する空間」であり、日本人としての人間力を育成するための教育資源が存在していることも大きな可能性を秘めているとされました。

それを踏まえて、「栃木の里山に学ぶ」では、以下の4つを具体的な目標としたとのことでした。

- ①環境(景観)、人、暮らしなど、地域(里山)の現状を知る。
- ②地域の人(里山住民)と協同しながら課題解決策を探る。
- ③地域(里山)に伝わる技術、知識、考え方を学ぶ。
- ④能動的な前向きな姿勢を養う。

教育方法が体系的に確立しておらず、どのような教育ができるのか、手探りで進めていく部分が多いものの、教育現場としてのポテンシャルを最大限に活かせるように心がけたとのことでした。

## ✦ 授業の準備から実施に至るまで

体験型学習は、地域の人々が生活をしている場に「介入」することでもあるため、とくに事前準備には特に気を使ったそうです。受け入れ先との信頼関係を構築するにあたり、集落を知ることも含めて長期間要したとのこと（里山体験学習の試行2年も含めて）。

### ★授業の前に地域住民に向けて行ったこと

- ①役員会の出席や依頼文の作成
- ②自治会総会や回覧板を通じた地域住民への周知
- ③受け入れ先との認識の共有、授業内容の見える化（タイムスケジュールの配布）

先方に授業の趣旨を理解してもらい、当日に混乱や誤解が生じないように、念入りに用意していることを、報告から感じ取ることができました。

同時に、土日にて学外で、集中講義として行うため、通常の授業とは異なる配慮も要することも、事前の説明会の様子から窺い知ることができます。

### ★授業の前に学生に向けて行ったこと

#### 事前にオリエンテーションを実施

当日のスケジュールや、欠席連絡、持参物、当日の集合・移動、礼儀、作業内容、レポート課題など約束事の説明

受け入れ先の住民に迷惑をかけないように、挨拶をする、事前に名前を確認するなど、基本的な礼儀作法もオリエンテーションで伝える重要な事項とのこと。資料と共に説明するそうですが、約束事を守れない学生が少なからずあり、当日は気を休めることができないということが印象的でした。

## ✦ 授業の内容および特に工夫している点

授業は、集落を知る（集落点検）、地域の伝統的技術を学ぶ（田植えなど）、地域資源の活用法を学ぶ（草木染、苔玉づくり）、地域の環境保全について学ぶ（水田

の除草、オオムラサキの放蝶）、活性化活動を学ぶ（まとめのワークショップ、意見交換）の計5回で、土曜日もしくは日曜日に集落にスクールバスで移動して実施したそうです。時間は、8時40分から17時までを予定し、例えば午前中に「やぐら建て」を、午後には「田植え」を体験するというように、1日に複数の作業をするという流れとなっていました。

### 【授業の様子】



この授業で特徴的なことは、地域住民の期待と学生の多くが1年生であるという現状を踏まえて、大学と地域の成果の共有化が行われていることです。

### ★地域住民の期待

地域住民が大学の授業を受け入れる際、地域活性化につながるような若い人のアイデアを得ることを強く期待する傾向。

### ★学生の傾向

学生の多くは大学に入学したばかりの1年生。  
作業することに手一杯！  
→直ちに成果を出せるわけではない。

期待と現実のギャップを埋めるため、地域住民が教育活動に参加することの意義を理解してもらうことが重要であると感じたそうです。そこで、異世代の人々との交流を通じて学生のコミュニケーション力を高める、達成感や爽快感を通じて学生の主体性を高めるなど、地域の教育力の向上も意識してもらおうようにした

そうです。授業に関わった地域住民とは、授業後に毎回ミーティングを実施し、学生に対する対応の仕方など振り返りをする一方、学生にもレポート課題を出すことで、学生が何を感じたり考えたりしたのかを、地域住民が確認できるようにしたということです。

#### ✦ 成果と課題

平井先生は、里山に注目した体験型学習は、学部を超えて学生が交流できたり、世代が異なる人々と会話をしたりと、異なる環境のなかでコミュニケーション力を向上させるきっかけになる点に意義を感じたそうです。特に、礼儀、態度、姿勢(相手を敬うなど)というような、日常生活や仕事をするなかで必要な基礎力は勿論のこと、相手の行動や心を読み取ろうとすることで能動性も備わるのではないかとおっしゃっていました。また、地域の方々の温かさに触れることで、おもてなしの心など、座学とは異なることを学ぶことができたように感じたそうです。

【授業の様子】



話題提供後の質疑応答では、参加者の関心を踏まえて、活発な意見交換が行われました。注目したい議論のひとつが、基盤教育として多様な体験型学習が開講されていることを踏まえた周知の仕方です。同じ「里山」がキーワードであっても、教員の専門性や問題意識はそれぞれ違いがあり、それに従って、フィールドワークの方法も大きく異なるそうです。

#### ★フィールドワークの方法(例)

##### 形態

- ①小グループに分かれて行動する
- ②履修者全員で行動する

##### 活動内容

- ①聴き取りなどの調査をする〈研究寄り〉
  - ②全員で同じ作業する〈協同作業寄り〉
- 授業の趣旨に即して異なる手法が採用されている!

このようなフィールドワークのテーマや手法の差異を明確化することで、学生の関心をさらに惹きつけ、履修する際の参考になるのではないかという意見が出されました。

また、体験型学習の場合、授業を担当している教員は、コミュニケーション力や問題解決力など、学生の成長を肌で感じることはできますが、それをどのように成績評価に結びつけていくかが難しいのではないかという質問が出ました。成績評価は勿論のこと、学生は自己の成長を思いのほか自覚していないのではないか、それを意識化させることも大切なのではないかという意見が出されました。

(報告:長谷川詩織)